

チャペル ブックレット No.23

祈りつつ学び、感謝しつつ働く

—内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ—

葛井 義憲



石河光俊(1894~1979)作  
「講壇前の内村鑑三の仰瞻(ぎょうせん)」名古屋学院大学蔵

**NGU**  
Culture & Human Resources  
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

名古屋学院大学

**NGU**  
Culture & Human Resources  
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

名古屋学院大学 宗教部



祈りつつ学び、感謝しつつ働く

— 内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ —

名古屋学院大学 名誉教授

葛井 義憲

---

本稿は2019年5月31日、名古屋学院大学 F.C. クラインホールを会場として開催された一般社団法人キリスト教学校教育同盟第107回定時総会の特別プログラム「講演 I」(14:00～15:00)の内容の記録の一部である。

ようこそ名古屋学院大学においでくださいました。本日、内村鑑三が本学の前身、名古屋英和学校に赴任する頃の、彼の歩み路を少しばかりお話をさせていただきます。紹介いただきましたように、語る者は葛井義憲といひます。この字で、葛井（ふじい）と読みます。読みづらい苗字ですが、お覚えいただければ幸いです。

さて、内村鑑三が名古屋英和学校へ赴任したのは、1896（明治29）年9月のことである。半年ほどの名古屋英和学校での教員生活です。短いと言えば、本当に短期間である。そして、この時代の彼に関する資料はほとんどないのですが、言い伝えは残っております。

生徒たちに寄り添い、生徒とともに「キリスト教を主とする宗教」、「地理学」などを学びあい、学校の敷地で農作業を行い、また、生徒たちと散策などをしたようです。

札幌農学校出身の秀才、机上の勉学と農業実習に明け暮れた、彼の札幌時代の光景を写しだす伝承です。創立当初、名古屋英和学校は一学年、20人ほどの学校でした。小さな、ヤソの学校です。迫害される歴史と繋がる「ヤソのこの学校」は珍しさはあったでしょうが、まだまだ、この地で、認められ、高く評価されるまでの歴史は刻んでいません。

名古屋英和学校が設立したのは、1887（明治20）年11月であります。本科2年予科4年制の学校として出発します。創立は内村赴任のほぼ、9年前であります。美普教会（メソジスト・プロテスタント教会）の宣教師、F.C. クライン博士たちの祈りのもとに誕生しました。そして学内には、美普教会の伝道所も開設され、夜学部もできていきます。向学心に燃える若人に勉学の機会を与えようとしました。

こうした希望にあふれた発展への歩みの折、創立から4年後の1891年10月のことです。愛知とその近隣の地に大地震がおそいました。そして学内にあったレンガづくりのチャペルが倒壊しました。その日の朝、周辺いくつかの教会の人たちが集まって、このチャペルで祈祷会が行われていました。

今、私どもがいます、この熱田の地で伝道活動をしていた大石余平、妻ふゆ、長男伊作もこの祈祷会に出ておりました。余平とふゆはこの地震で召されます。伊作は大けがをしますが、一命は取り留めました。伊作はのちに、東京に、現在もあります文化学院を創立し、大正期の代表的な教育者として活躍し、また、執筆家としても精力的に書物を書き、多くの若人を社会へと送り出しました。伊作に関してもう少しだけ付け加えさせていただきます。彼の叔父、つまり、父の弟は大逆事件で処刑された眼科医の大石誠之助です。伊作は後に、亡くなった母方の家督を継いで、西村伊作となります。

名古屋英和学校へ、内村が赴任する前、かかる出来事がありました。そして内村もまた、この学校に赴任する前は、大層厳しく、辛く、試練一杯のもので歩まねばなりませんでした。

この時期の彼に関する有名な出来事は、世に言われる「不敬事件」であります。1891（明治24）年1月のことである。この折、彼は第一高等中学校囑託教員でありました。場所は東京です。結婚して一年半もたたないかずさんと二人暮らしです。

この1月9日、第一高等中学校で、「教育勅語の奉読式」がありました。「教育勅語」は御存じのように、1890（明治23）年10月30日に発布されました。戦前、教育に関心のある方々はこの「勅語」の冒頭を誦（そら）んじておられたことでしょう。「朕（ちん）、おもうに我か皇祖皇宗（こうそこうそう）国を肇（はじ）むること宏遠（こうえん）に徳を樹（た）つること深厚（しんこう）なり」。そして最後に、明治天皇の名前と印が押された「御名御璽（ぎよめい、ぎよじ）」で締めくくられています。

この式典に出席した人々は壇上にあがり、「教育勅語」に深々とお辞儀をすることを求められました。内村も壇上にあがります。彼はキリスト者としての戸惑いがありました。天皇に対し尊敬と親しみを覚えています。しかし、内村は天皇を神なる者として、「御名御璽（ぎよめいぎよじ）」に「拝礼」することには逡巡がありました。実際は軽く頭を下げたぐらいだったのでしょう。

しかし、この内村の「仕草」、お辞儀が大きな反発・糾弾を生じさせていきました。内村は「不敬漢」「国賊」だとの声がただちに学内にあがり出しました。さらに、新聞なども同様に彼をなじり、学内外に彼を非難し、詰め寄る人たちが現れました。

この1月9日の「奉読式」後、内村は流感にかかり、床に伏せます。糾弾する人々は内村の家へ押しかけてきます。床についている内村は対応できません。押しかけた人々と対応したのは、妻かず（加寿子）です。心身がすりへったことでしょう。恐怖と不安に苛まれたことでしょう。

3か月後の4月14日、かずは日本組合基督教会本郷教会牧師横井時雄から洗礼を受けます。そして5日後の4月19日、天へと召されていきます。わずか1年9か月ほどの結婚生活でした。葬儀は寂しいものでした。葬列は明治女学校校長巖本善治を先頭に、かずの棺の車の両側に第一高等中学校の生徒二人がつき、その後を喪主の内村、札幌農学校の後輩、地理学者の志賀重昂（しげたか）が従いました。

この葬儀後、「国賊」と糾弾される内村は、すでに第一高等中学校を退職し、全国各地を転々とします。1892年9月、大阪にありました泰西学館の教員とし

て赴任します。1893年4月、泰西学館を辞して、九州の熊本英学校に赴任します。さらに、同年8月には、京都へと移転します。

彼はここ京都で、執筆を糧として、生活をする予定だったのでしょうか。しかし、現在でもそうですが、筆一本で生活することは相当難しいです。この折の生活は、赤貧洗うが如しだったと言われています。

こうした貧しく、厳しい生活のなかに、彼の次の妻となる人が現れました。1892年12月のことです。京都の地方裁判所判事、岡田透の娘、しず（静子）です。透は内村が「国賊」と言われ、社会から排斥・糾弾されていることを承知の上で、娘、しずの結婚を認めました。内村は、晩年まで、「しずが内村の家に幸福をもたらした」と周りに伝えていたようです。そして1894年3月、貧しい京都生活に「喜び」と「光」をもたらす、娘ルツ（ルツ子）が誕生しました。

「立身出世」をうたい、「欧米と伍すること」を奨励し、「ひたすら学び続けること」を国民に求める明治の識者たちの期待に、十分に応えられるだけの資質と勤勉さと独創性を有す内村は、この国が掲げる「上昇・出世の路線」から逸脱し、ただ、ただ、十字架を仰ぎ、キリストを仰ぎ見上げ、キリストと共に、聖霊に導かれつつ、この世の片隅に生きる人々の幸を、喜びを願って歩もうとするのです。

「不敬事件」での糾弾・排斥、また、妻かすの「犠牲的な死」は内村を根底から、徹底的に打ち据え、「自らが有す資質」「自らの普段の励み」などがいかに「限りある、もろいものであるか」を痛く知らされてゆくのです。そしてその「限界と、もろさ」を越えて、彼は主に在って生きることより生まれる平安、主を仰ぎみて日々歩むことの喜びを知らされます。

そして、日々、信仰の師、アメリカのアマスト大学学長、シーリーとの語らい、導きをも思い出したことでしょう。ご存じの方々も多いことかと思いますが、シーリーが内村に語ったと言われている有名な言葉がありますので、紹介致します。シーリー学長はアマスト大学で学ぶ内村に次のように語りかけたようです。

「内村、君は君の内のみを見るからいけない。君は君の外を見なければいけない。なぜ己に省みることを止めて十字架の上に君の罪を贖い給いしイエスを仰ぎみないのか。君の為すところは、小児が植木を鉢に植えて、その成長を確かめんとほして毎日その根を抜いて見ると同然である。何故にこれを神と日光とに委ね奉り、安心して君の成長をまたんのか。」この言葉の要旨を、「日記」「雑誌」「書物」に、彼はなんども、なんども書きます。内村にとって、シーリー学長の教えは終生忘れられず、なにかがあると思出す大事な教えが詰まったものだったのでしょう。俊秀、内村のどこかに、自らの力、自らの優秀さ、修得

した知識に頼ろうとする思いはあったことでしょうか。そしてそれらをもって、明治が奨励する「上」へ、「上」へと伸びあがろうとする気持ちもあったことでしょうか。

しかし、それをもって生きることは、いかに不安・焦り・空しさ・絶望をもたらすものであるかも、試練の一杯つまった日々の中で知らされたことでしょうか。

しずと暮らす大阪・京都時代は、内村の初期代表作や、講演がいくつも生まれました。たとえば、有名な『基督信徒の慰め』（警醒社書店）は1893年2月、しずと結婚した後の、大阪の泰西学館時代のものです。『求安録』（警醒社書店）も1893年8月に出版。この1893年8月は京都で暮らそうとする時であります。さらに、多くの人々を、長い期間にわたって、そして今も鼓舞し続ける講演『後世への最大遺物』は1894年7月です。これは箱根で基督教青年会の若人たちに語り、1897（明治30）年7月には書物となって世に出ています。

彼は妻しず、娘ルツに囲まれながら、貧しい中でも、精力的に書き、語っています。さて、ここで、『後世への最大遺物』のなかの文章を紹介したいと思います。

「この世の中はこれは決して悪魔が支配する世の中にあらずして、神が支配する世の中であるということに信ずることである。失望の世の中にあらずして、希望の世の中であることを信ずることである。この世の中は悲嘆の世の中ではなくして、歡喜の世の中であるという考えを我々の生涯に実行して、その生涯を世の中への贈り物としてこの世を去るということであります。その遺物—高尚なる勇ましい生涯—は誰にも遺すことのできる遺物ではないかと思う。」

若人に、素直に、しかも、希望をもって語りかけています。それも、排斥も罵倒も、悲哀・孤立なども味わいつくした中からの語りかけです。そこにあるのは、明日を築くエリート、この世での輝ける未来が約束された者だとの「自負」から発せられた言葉ではありません。それとは反対の、「弱く、小さく、貧しさ」を知らされ、味わわされる日々の下から表れでる言葉です。彼は「不敬事件」で叩きのめされ、結婚生活2年もたたない妻かすを失ったことは、自らがいかに「弱く、小さく、貧しき者」であるかを実感させられたことでしょうか。そんな「弱く、小さな者」に、この世で生きる意味や、役割があるのだろうか。と、問いつづけたことでしょうか。しかし、あの「いのちの源」である神様がこの世の闇に、自らのいのちを投げすてようとされるのだろうか。希望も、喜びも味わわず、消えゆけと望まれるのでしょうか。

こうした「絶望」が押し寄せせる中で思い出すことができました。それは、1885

年1月から7月ごろのことです。アメリカへと渡り、ペンシルベニア州エルウィンにある「知的障がい児養護院」での看護人として働いた日々の事柄であります。養護院院長カーリンとの交わり、指導の日々の中のことです。

内村は「知的障がい児養護院」でのカーリンから聞かされた言葉を思い出します。カーリンは内村に、「神は一人も無益なる人間をつくりたまわない」と語りました。彼はエルウィン時代、「子どもたちのお尻の世話をし、排尿の始末をした体験」を帰国後、6年ほど経った1894年8月から出される「国民之友」掲載の「流竄録（りゅうざんろく）」のなかに綴っています。そして、「国民之友」の読者に「この仕事に従事する内村の気持ちを察してくれ」と語っています。

内村の中にも、また、母ヤソたちの心のうちにもあったことでしょう。母や兄弟たちは、内村の将来に期待を寄せていました。札幌農学校を首席で卒業し、アメリカへと遊学した俊秀の先には、明るい「立身出世」が約束されていることだろう。

しかし、帰国後の現実とは違えます。彼の人生を根底からひっくりかえす「不敬事件」に遭遇し、妻かずを排斥と混乱の日々の中で失い、さらに、各地を転々とする「憂き目」からは、輝かしい将来への「望み」は次第に消え失せていきます。そして、ただ、主にすがり、十字架のイエスを仰ぎ見上げ、キリストに贖われ、赦され、聖霊に導かれつつ、生きるとの思いがあふれ出します。そして、「自らの力」とはなんと限りあるものなのか。

彼が培った「力」への信頼は次第に、「主に在って赦され、導かれて生きる」との「生き方」へと転換していきます。彼の生き方の底には、「主をおおぎ見上げる」「仰瞻（ぎょうせん）」がありました。彼は帰国後一層、自らは「弱く、小さく、貧しい者」であることを実感させられていったのです。次の妻、しずと結婚した2か月のちの1893年2月、彼の代表作『基督信徒の慰』が生まれます。その中に、天へと召されたかずの「墓参り」の出来事が記されています。彼はそこで、「神の静かな、細き声」を耳にしたのです。そこを紹介しましょう。

「一日余は彼〔かず〕の墓に至り、塵を払い花をたむけ、最も高きものに祈らんとするや、細き声あり一天よりの声か彼の声か余は知らず一、余に語って曰く、「汝何故に、汝の愛する者のために泣くや、汝なお彼に報ゆるの時をもおりをも有せり、彼の汝に尽くせしは汝より報を得んがためにあらず、汝をして内にかえりみざらしめ、汝の全心全力をもって汝の神と国とに尽くさしめんがためなり、汝もし我に報いんとならば、この国この民につかえよ、かの家なく、路頭に迷う老婦は我なり、我に尽くさんと欲せば、彼女に尽くせ、かの貧にせめられて身を恥辱の中に沈むる可憐の少女は我なり、我に報いんとならば彼女を救え、かの我の如く早く父母に別れ、憂苦頼るべきなき児女は我なり、汝彼女を慰むるは我を慰むるなり、汝の悲嘆後悔は無益なり、早く汝の家にかえり、

心思を磨き、信仰に進み、愛と善との業（わざ）をなし、霊の王国に来る時はあまたの勝利の分捕物をもって、我が主と我とよるこぼせよ。」

墓前で、彼の耳に達した「静かな、細き声」は彼のこれからの、この世での生き方を示唆するものであります。

「小さく、貧しく、弱き者」である内村にも、この世で「果たせること」があると教えてくれるのです。「後添え」として来てくれたしず、また、『基督信徒の慰』が出版された翌年、1894（明治27）年3月、誕生した娘ルツも、彼の悲哀と貧しさを溶かしてくれたことでしょう。

その中で、執筆をし、講演を行い、各地の人々を訪ねたりもしています。しかも、日本の行く末に思いを致し、先ほど述べた、箱根での講演『後世への最大遺物』を若人に語る一方、また、「日清戦争の義」を論じ、「武力をもって、平和をもたらし、また、虐げられた人々、抑圧された処の解放」への思索と執筆を行い、更には、孤児教育を大きく展開する岡山の石井十次を訪ね、この世の「貧しさと悲しみと闘」を見つめつづけようとしています。さらに、彼の代表作の一つ、『How I became a Christian（余はいかにしてキリスト信徒となりしか）』を刊行し、さらに、『日本及び日本人』（のちの『代表的日本人』）をも出版します。そこには、「静かな、細き声」に耳を傾ける5人の日本人、「真理」に生き、「神の声」から与えられる「天職、mission」に励む西郷隆盛、米沢藩主上杉鷹山、「農民の聖者」二宮尊徳、「村の先生」中江藤樹、日蓮の評伝が書かれています。この5人に共通することは「弱く、小さく、貧しい存在」に目を向け、重視し、自らの「私利私欲」を排して、「隣人を愛し、尊重」しようとするものです。「静かな、細き声」は、「小さく、弱く、貧しいのち」を尊び、愛の心をもって生きよと励まします。これらの執筆、講演は1893（明治26）年から1895（明治28）年、つまり、三年ほどです。

もう一つ、付け加えますと、内村が石井十次を訪問したのは1896年5月です。同年2月、京都に内村を訪ねた石井十次への返礼です。この5月の岡山訪問は、1891年10月末以降、名古屋で展開された、愛と善意の活動も語り合われたことでしょう。

そして、岡山訪問の3か月後の、1896年8月、名古屋英和学校2代目校長、A.R. モルガン宣教師が京都の内村を訪ねています。この訪問者、つまり、内村を訪ねてくれたモルガンに対する彼の評価は「モルガンは素直で純真な性格の人物、そしてキリストに忠実に仕え、日本人を心から愛する謙遜なキリストの僕である」と伝えています。

この時期、名古屋英和学校には、モルフィというメソジスト・プロテスタントの宣教師もいます。彼は妻ノーラとともに、1893年8月、名古屋英和学校へ赴任しています。そして宣教師として、また、宗教・英語・音楽などを担当す

る教師としてここで働きだしています。

彼はアイルランド系のアメリカ人です。内村はモルフィについて、晩年まで、「日誌」などに記しています。その一つを見ますと、「モルフィは、よく日本人を解し、我らに対し深甚の同情をいただき、見るからに気持ちのよきキリストにある愛する兄弟である」と語ります。また、モルフィの研究者である小川京子さんの『石つぶての中で』で、モルフィが1908年に、「名古屋英和学校をやめて、本国へ戻った後も、アメリカ西海岸の日系アメリカ人、日本人の世話に奔走した」と記しています。彼もまた、謙遜で、優しく、正義を愛し、痛み・悲しみ・貧しき人々に心を寄せつづける人です。そんなモルフィの人格に内村は強く心を惹かれ続けます。

このモルフィの名古屋英和学校での教育活動、また、宣教活動の中で、彼モルフィが頭を痛めたことは、彼の周りに集まる幾人もの青年たちが、「遊郭に通い、志を失っていくこと」でした。その苦悩の表白に耳を傾けてみましょう。彼は次のように述べます。「余の処に道を求めてくる数多の青年のうち、学校の試験に落第し、墮落する者たちがある。その原因を探求していくと、そこに公娼制度があり、彼ら青年たちの墮落は一にこの女性たちに原因することを知れり」。

モルフィは「遊郭」「くるわ」、また「公娼」制度があることを知らされ、彼の周りに集う青年たちの何人かが、このことによって、求道生活、学校生活から「落ちこぼれていく」事実を知らされたのです。そこより、モルフィの名古屋での「廢娼運動」挺身がはじまるのです。

そして、この「廢娼」という事柄に目をやるとき、もう一度、1891年10月の濃尾地震の出来事を見ておかなければなりません。この10月28日は愛知・岐阜・三重などにすさまじい惨状をもたらしました。2日後の1891年10月30日の「東京日日新聞」は「愛知県下、死者1533人、負傷者436人、道路、堤防、鉄道、ため池、破損多し。岐阜無くなったか。岐阜より電報達せず。各地の遭難者は野宿し、目下、炊き出しを求める。」と書かれています。そしてこの惨状の地に、各地から、人々がやってきます。中部地方以西からは、石井十次、山室軍平、岡山英学校の生徒たち、同志社病院のベリーを中心とした医師・看護婦、同志社生徒たち、関西学院生徒たちなどです。また、中部地方以东からは東京の赤坂病院のホイットニーをはじめとする医師・看護婦の一群。東京婦人矯風会より派遣された医師・看護婦。さらに、明治女学校の巖本善治、立教女学校の石井亮一、牧師志方之善、この時に結成された「震地伝道隊」の藤井米八郎など。続々とやってきます。さらに、各地から、義捐金、物品などもとどけられます。このような善意の支援が地震のあった1891年10月28日以降すぐに高まっています。

それとともに、全国各地から、孤児となった「女の子」を買い集める「女衞」も多く押し寄せてきます。惨状の地で、肉親などを失った子どもたちを買い集め、働かせようとする人たちが、その地を歩き回り、僅かのお金で駆り集めていくのです。

この暴挙に心を痛める人たちも現れます。1891年12月末、石井亮一、志方之善、志方の妻、医師であり、明治女学校校医である荻野吟子たちが「孤女学院」を、東京の志方、荻野の自宅に開設します。そして明治女学校の生徒たちも手伝います。

彼らは最初、震災の地から、10数名の子どもたちを汽車で東京へ連れてきます。寒い冬空の中を、乳飲み子をいれた女の子たちを、東京へ連れてきます。そして1892年4月には、東京の北豊島郡滝乃川村に新校舎を完成させます。その折、救出された数十名の子どもたちは午前「簡易の学科」を学び、午後は「封筒、巻紙」などの小物づくりに精をだします。そして、日曜日の朝は、礼拝をもって過ごします。しかしてこの孤児のなかに、知的障がいのお子さんがいました。惨状の地にキリストの愛が少しでも届けられることを願って奔走した石井亮一は1896年に、アメリカにわたり、知的障がい児教育をまなび、翌年の1897年に、「孤女学院」を改称して、日本で最初の知的障がい児教育の学校、「滝乃川学園」を開設します。

こんなキリストの愛の活動が内村の周辺にありました。そしてあの内村が、かすの墓前で耳にした「静かな、細い声」の事柄が、名古屋の濃尾地震以降に具体的に展開されていたのです。もう一度、『基督信徒の慰』の文章を思い出しましょう。「かの家なく、路頭に迷う老婦は我なり、我に尽くさんと欲せば、彼女に尽くせ、かの貧にせめられて身を恥辱の中に沈むる可憐の少女は我なり、我に報いんとならば彼女を救え、かの我の如く早く父母に別れ、憂苦頼るべきなき児女は我なり、汝彼女を慰むるは我を慰むるなり、汝の悲嘆後悔は無益なり」。

まだ、訪れぬ中部地域の惨状と救援活動を、それに携わった友人、たとえば、巖本善治や、石井十次などからも教えられ、自らも、そうした窮状に身を寄せ、救いの働きにいくらかでも参与したいと、願ったことでしょう。

1896年9月、内村は名古屋英和学校に赴任します。執筆や講演などで日々を過ごしていた内村に、毎月70円の安定した収入が入るようになります。赤貧洗うがごとの生活にゆとりがもたらされます。名古屋までの、迫害と罵倒に打ちのめされるような旅路の先に、窮状を越えて再生をもたらす名古屋がありました。「戦う事」は生きる上での「本望（ほんもう）」だとする武士の子、内村はこの迫害の強風に見舞われる旅路の中で、大きく変えられていくのです。自らの力に頼り、「名誉、地位、財力」などをもたらす「立身出世」の歩みから



はずれ、一つひとつの「いのちの尊さ」を知らされ、とりわけ、「弱く、小さく、貧しい」境涯にある人々、処に、大きく関心を寄せ、十字架上のイエスを見上げ、キリストの贖い、聖霊の導きに全心身を託して、歩む者とされていったのです。

名古屋英和学校時代の「口伝」があります。内村は生徒たちに「『祈りつつ学び、感謝しつつ働く』精神を養うことを願い、校地内に小規模であったが農園を開拓し、豚の飼育などもはじめて、みずから、生徒の先頭にたって、汗を流しました。また、蔵書を多数学校に寄贈し、読書会を開いて、膝を交えて生徒の指導に当たりました。」とされています。教育に非常な関心をもつ、先生内村らしい、生徒との交わりです。名古屋英和学校赴任前に行った講演『後世への最大遺物』で述べましたように「この世は神が支配する世の中、希望の世の中、歓喜の世の中であることを知り」、「希望と喜び」をもって日々を果敢に生きることを奨励する思いを抱いて、先生内村は名古屋に赴任したのでしょうか。そして、思索、祈り、実践などの意義がどんなに生きる上で必要かを会得して、生徒と向かいあったのでしょうか。

彼もまた、札幌農学校での学び以降、祈る事、机上での勉学に励むこと、更に、汗をかき、汗をかく、農業実習などが、人々の人格を豊かにし、周りの人々の喜びや悲しみなどに心を向けさせていったことでしょうか。そこから会得するものが沢山あることも知らされたことでしょうか。

そのなかでも、とりわけ、汗を流す。汗を流す。汗を流し、人々とともに汗を流して、日々を生きることから、自らの「小ささ」、周りの存在の「温かさ、優しさ」、主イエスの導きに気遣かされ、育てられたことでしょうか。もしかすれば、私たちもまた、「絶頂で、得意の時」よりも、「辛く、悲しく、排斥される」ような事態の中で人間性を深めていくのかもしれませんが。内村は、先ほども述べましたように、エルインの「知的障がい児養護院」看護人としての働き、アマスト大学長シーリーとの信仰の交わり、さらに、「不敬事件」を切っ掛けに、全国から「罵倒・排斥される」出来事の中で、十字架のキリストを仰ぎ見あげて、生き、すべてを神に託して歩むことを知らされ続けました。

名古屋英和学校の「建学の精神」は「敬神愛人」です。内村が世に表わした『代表的日本人』の中には西郷隆盛が書かれています。内村は「敬天愛人」を掲げ、「真理」に生き、「正義」を求め、「神の声」に耳を傾け、生きようとする西郷を敬愛しつつづけています。

そんな彼内村が名古屋に来ました。窮状から再生しようとする名古屋に来ました。多くの人々が地震の辛苦に耐え、希望をもって生きようとする名古屋を応援しつつづける、この名古屋に来ました。彼は「亡き妻かずの墓前」で、「静かな、細い神の声」を聴きます。「老婦を、恥辱にまみれた少女を、孤児たち」に

「温かな手を伸ばして」欲しいとの「声」を聴きます。

先生内村は、生徒たちに「悲しみ、苦しみ」に手を差し伸べる人になって欲しい。そうした人々、処をもっと、もっと、「痛ませ、足蹴にする」ような人間としてでなく、「愛の人」「キリストの赦しと愛をもって、社会で働く人」になって欲しいとの願いをもって、若人の教育に積極的に参与していったのです。さらに、明日を、将来をこのような若者に「託したい」との祈りと願いの下で授業や、課外活動をしたのです。内村が担当した科目は「基督教を中心とする宗教・地理や歴史・博物」などであったとも言われています。キリスト者で、札幌農学校出身者で、「愛国者」である内村らしい担当科目です。内村の心のうちには、次のような言葉が響いていたことでしょうか。「この世には捨てるべき人間、いのち」など一つもない。創造の神よりいのちを与えられた存在が不当に扱われ、滅ぼされることはまさにそのいのちが誕生した処に大きな損失をあたえることである。それよりその存在が生かされ、育まれ、使命に生きることの方がその処を豊饒な処にし、大いなる「益」をその処にもたらすことであろう。」

内村の一つひとつのいのちを尊び、その成長・発達を願い、そして「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」こうとする彼の下に、1897年初め、東京の朝報社の社長黒岩涙香（周六）から新聞「万朝報」の英文欄主筆として来てもらえないかとの誘いがありました。この新聞の発展に燃える黒岩は一人でも多くの読者を得るためには、いささかの悪徳、「脅迫、恫喝」まがいなどを行っても良いとの考えの持ち主でした。当時の人々は彼のことを「まむしの周六」などと呼んでいます。この人物が名古屋英和学校教員であり、人々、とりわけ、若人に希望と喜びと使命のあることを語り、力づけ、また、この世で困難を覚えて生き、苦しむ人々を励まし、支えようとする内村を招聘しようとするのです。そこには計算がいささかあったかもしれませんが。内村招聘が実現すれば、「悪徳社長」「ごろつき新聞」などとの「汚名」をいくらかでも払拭し、「公正で、正義を尊び、弱く、小さな側に立って」経営を行おうとするのだろうと、これまでのダークなイメージを少しでも消し去りたいとの「願い」もあったのかもしれませんが。

内村は1897（明治30）年2月、その誘いを承諾し、「万朝報」英文欄主筆に就任します。名古屋での教員生活は半年ほどの短いものでした。しかし、彼の「祈りつつ学び、感謝しつつ働く教育姿勢、また、明日を担う若い人たちの成長・発達に取り組む」彼の教育姿勢はこの学校に多くの「学ぶことの意義、この世で生きる上での指針、神と共に歩む生活の大事さ」を残していきました。

彼は英文欄主筆になっても、若人に希望と喜びをもって生き、また、遅しく、不屈に、神を仰ぎ見あげて、日々を歩むこと、さらに「小さく、貧しく、弱い

人々」の傍らにありつづけることを願って、人々、とりわけ、若人に向かって語り続けていきます。

あのイエス誕生の日、イエスの誕生を祝いに出かけたのは羊飼いたちでした。彼らもまた、「弱く、貧しく、小さく、泥まみれになって生きる人たち」です。その彼らが救世主の誕生を祝いに来るのです。内村はこの神からのメッセージに心を捉えられて仕方がないのです。この世にある「貧しく、小さく、弱い」人々が尊い人間として扱われ、彼らもまた「いのちを輝かし、神から祝福」されたものであることを、社会が、世界がこのことを承知したとき、社会も、世界も、どんなに「喜びに満ちた、希望にあふれた処」となることであろうと祈り、働くのです。

「この世は悪魔が支配する世界でなく、神が支配する世界」。神の創造、十字架のイエス、キリストの贖い、赦し、そして、造られた者たちが神と共に喜び、生きる意味を、一層明瞭に表わしていきます。名古屋での日々を通過する中で、「非戦（戦争をしないこと）」を、「いのちの尊さ」を、「闇の世界」が「希望と喜びの世界」へと変わることを祈りつつ、進んでいきます。なんども、なんども、若人に語りかけ、成長・発達を願い、明日を託し、さらに、足尾銅山鉍毒事件の被害者の救済にも奔走していきます。

そこには、この世は神が支配する世界である。どの「いのち」も無残に扱われてはいけぬ処なのである。

「貧しく、弱く、虐げられた人々」に救いの光が当てられ、「喜びと希望に満ちる世界」となることを求めて、日々、祈りつつ、感謝しつつ、歩もうとします。そしてこの祈りとすべての存在を尊ぶ内村の姿勢は今の私たちにも、力ある励ましのメッセージとなります。

「祈りつつ学び、感謝しつつ働くー内村鑑三名古屋英和学校赴任のころ」のための参考まで

葛井 義憲

1. 名古屋学院大学の財政援助のもとに、1996年3月、勁草書房より『「内村鑑三」と出会って』（堀孝彦他編）が出版された。執筆者は6人。その中の5人は既に天へと召されたか、また、退職して種々の分野で活動している。そしてこの書物が出される契機となったのは1989年1月、同僚であり、また、我々の教育・研究活動を指導した社会学者の後藤宏之氏の死であった。

氏は名古屋学院大学の前身、名古屋英和学校で働いたことのある内村鑑三に大きな関心をもっておられた。そこで、残された者たちは氏の遺志を継いで、名古屋英和学校時代の内村の事績を少しでも表したいと願い、近代思想史研究会（それまでも、細々と内村などに関する研究会を行っていました）のもとで「名古屋英和学校時代の内村」の働きを追及し出した。集まる者は臨床心理学・人類学・倫理学・宗教学・日本思想史・キリスト教史・経済史などを主に専攻する者たち。しかし、この書物が出版されるまでには、いくつもの困難がありました。名古屋英和学校に関する内村の資料の少なさとともに、上梓に当たっての出版費用や、執筆者の依頼に関してなどでした。

そんな執筆・出版に関する苦悩の一端は、はやくも、1961年に上梓されました『名古屋学院史』（名古屋学院）でも現われています。

「半年にも満たぬ僅かな在職の間に、内村鑑三の[名古屋]英和学校に与えた感化は、偉大なものがあつた。(中略)「彼は」『祈りつつ学び、感謝しつつ働く』精神を養うために、校地内に小規模ではあつたが農園を開拓し、豚の飼育なども始めて、自ら生徒の先頭に立って汗を流した。また、蔵書を多数学校に寄贈し、読書会を開いて、膝を交えて生徒の指導に当たつた。これが端緒となつて、図書室が学校にうまれたといわれる。」

これは後に「偉大なる宗教者・思想家となつた内村伝承」であります。半年という期間は、ここにおいて際立った地域との交わり、また、卓越した生徒指導などを展開するには大変短い期間であります。

## 2. 1890年代の内村鑑三の簡略年表

- 1861（万延2）年3月、江戸小石川で、内村宣之（高崎藩士）、ヤソの長男として誕生。下に弟、妹、7人が生まれる。
- 1889（明治32）年7月、高崎の横浜かずと結婚。
- 1890年9月、第一高等中学校嘱託教員に就任。
- 1891年1月、第一高等中学校で行われた「教育勅語奉読式」で、「不敬事件」を起こす。同年2月、同校を依願退職となる。



- 1891年4月19日、妻のかずが天へと召される。同月14日、彼女は横井時雄より病床洗礼を受ける。
- 1892(明治25)年9月、大阪の泰西学館教師に就任。
- 1892年12月、岡田しづ(京都の判事、岡田透の娘)と結婚。
- 1893年2月、代表作の一つ『基督信徒の慰め』を警醒社書店より出版。
- 1893年4月、泰西学館を辞し、熊本英学校へ赴任。
- 1893年7月、熊本英学校を辞し、京都へ。執筆をもって生活しようとする。
- 1893年8月、『求安録』(警醒社書店)を刊行、1894年2月『伝道之精神』・1894年5月『地理学考』を警醒社書店より出版。その間に、1893年11月How I became a Christian(余は如何にして基督信徒となりしか)を脱稿。
- 1894(明治27)年3月、娘ルツが誕生。
- 1894年7月、箱根で開催された基督教青年会第6回夏期学校で『後世への最大遺物』と題して講演。この講演は1897年7月、便利堂書店より出版。
- 1895年5月、How I became a Christian.を警醒社書店より上梓。この年(1895年)の11月、タイトルDiary of a Japanese Convert.としてシカゴのレヴェル社(Fleming H. Revel)から刊行。
- 1896(明治29)年9月、名古屋英和学校教師として赴任。
- 1897(明治30)年2月、社主黒岩周六(涙香)の招きで、東京の「万朝報」に入社。英文欄を担当し、英文主筆となる。
- 1897年11月、長男祐之が誕生。
- 1898年5月、朝報社を退社。
- 1898年6月、雑誌『東京独立雑誌』を創刊。
- 1899年7月、東京府豊玉郡の女子独立学校の校長に就任。前校長、加藤トシ子の遺言で。
- 1900(明治33)年9月、女子独立学校校長を辞任。
- 1900年10月、「聖書之研究」を刊。
- 1900年11月、札幌独立基督教会へ再度入会。
- 1930(昭和5)年3月28日、心臓病で天へ召される。2日後の3月30日、東京の今井館付属聖書講堂で葬儀。享年、70歳。

3. 表題に関するいくつかの資料・書籍類。

『名古屋学院史』(名古屋学院)、1961年。堀孝彦他編『「内村鑑三」と出会って』勁草書房、1996年。政池仁著『内村鑑三伝』教文館、1977年改訂版。鈴木範久著『内村鑑三の人と思想』岩波書店、2012年。『内村鑑三全集』1~8岩波書店、1980~81年。

葛井 義憲 (ふじい よしのり) 略歴

誕生

- 1948年3月 兵庫県に誕生

学歴

- 1972年3月 同志社大学神学部卒業(神学士)
- 1974年3月 同志社大学大学院神学研究科修士課程修了(神学修士)
- 1978年3月 同志社大学大学院神学研究科博士課程修了(神学博士)

職歴

- 1979年4月 日本基督教団中目黒教会牧師(～1984年3月)
- 1979年4月 中目黒幼稚園園長(～1984年3月)
- 1979年4月 桜美林大学講師(～1984年3月)
- 1984年4月 名古屋学院大学経済学部助教授(～1989年3月)
- 1989年4月 名古屋学院大学経済学部教授(～2006年3月)
- 2006年4月 名古屋学院大学人間健康学部教授(～2010年3月)
- 2009年4月 名古屋学院大学大学院外国語学研究科国際文化協力専攻修士課程兼任教授(～2018年3月)
- 2010年4月 名古屋学院大学スポーツ健康学部教授(～2013年3月)
- 2013年4月 名古屋学院大学法学部教授(～2018年3月)

この期間に、名古屋学院大学宗教部長・図書館長・人間健康学部長・スポーツ健康学部長代理。また、学校法人名古屋学院大学理事を歴任。

現在

名古屋学院大学名誉教授・学校法人名古屋学院大学理事

祈りつつ学び、感謝しつつ働く

—内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ—

葛井 義憲

チャペルブックレット No.23

2019年10月31日発行

編集・発行

名古屋学院大学 宗教部/キリスト教センター  
〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号  
TEL 052-678-4096

印刷 有限会社 五十嵐印刷社